かつて引きこもりで不登校に苦しんだ少年が立ち直り、高校卒業後の今春から山形県河北町で就農する。さまざまな人たちの支えで「農業」という新たな目標を見いだした18歳が、希望を抱き社会へ羽ばたく。

県立平塚農業高校初声分校（三浦市初声町和田）3年の有住海里さん＝横須賀市上町＝が引きこもりを経験したのは、中学生のころだった。

生まれつき肝臓を患っていた有住さんは先天性門脈欠損症で3歳時に生体肝移植手術を受けた。小学生時代は治療のために入退院の繰り返し。中学へ進むと授業についていけなくなり、1年時の夏休み明けから自宅にこもるようになった。

昼間はテレビを眺めて過ごす日々。当時は「『何で学校に来ないの』と同級生に聞かれるのが、一番嫌だった」が、学校への復帰を願う気持ちも同居していた。

土に触れ引きこもり克服

感謝を胸に一歩

横須賀の18歳、山形で就農

立ち直るきっかけとなったのは中1の秋。母の勧めで引きこもりや不登校の生徒らに学習、就労支援をするNPO法人「アンガージュマン・よこすか」（横須賀市上町）へ入会した。事務局長の石井利衣子さんは「子どもの考え方や発達の度合いは人それぞれ。自分で一つずつ決めていけばいいという環境があれば、周りがあれこれ手助けせずとも歩いていける」。同NPOの方針は、個々のペースで通ってもらい、社会とつながる場を提供しながら内面の変化を引き出す。自然体で接してもらえる居心地のよさを有住さんも感じていた。

その後、同NPOの紹介で訪れた山形県河北町の農業体験は、まさに「心地よい場」だった。

農家の人々と一緒にラ・フランスやサクランボを収穫。土に触れるのは初めてだったが、「自分自身が病気だったので、昔から命を大切にしようという気持ちは強かった」。大自然に囲まれて営む農作業に興味を持ち、卒業後の進路を農業高校に決めた。

高校を卒業し、新たな一歩を踏み出す有住さん＝平塚農業高校初声分校

高校入学後は少しずつ積極的になり、苦手だった運動にも挑み、自転車競技部に入った。3年時には生徒会長にも選ばれた。

そして目標に定めた就農。中学時代に通った農場に住み込む。顔見知りが待つとはいえ、新生活には不安も少なくない。だが、「何をやっても見守ってくれた母」をはじめ、支えてくれた人々に感謝しながら踏み出す一歩に迷いはない。

菜の花が花道を彩った2日の卒業式。有住さんは卒業生32人を代表してあいさつした。「こんなに素晴らしい仲間と過ごしてきた日々の思い出は僕の財産。先生方や周囲、そして、いいところも悪いところも受け止めてくれた家族のみんな、本当にありがとうございました」

（織田　匠）